HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	下中弥三郎の生命主義教育論 : デモクラシーとファシズムの〈間〉 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	伊東, 順真
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第16038号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92733
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	ITO_Junshin_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：伊東　順真

学位論文題名

下中弥三郎の生命主義教育論
―デモクラシーとファシズムの〈間〉―

本論文は、大正新教育期に個人と自由を尊重する教育論を展開したのち、1932 年頃を境に国家主義・全体主義教育論者に転じた下中弥三郎（1878-1961）について、その思想的軌跡を究明したものである。下中はその思想が変転を繰り返した様子から、「エタイの知れぬ怪物」と評されたほどであり、下中弥三郎を扱ったこれまでの先行研究は、新教育期とアジア・太平洋戦争期の彼の思想と行動を別個に捉えるものが多く、なぜ新教育運動の推進者が全体主義へと傾いていったのかという点を解明しようとするものは少ない。そこで本研究では、彼に一貫して見られる「生命」言説に着目し、両時期の彼の教育論を史料内在的に分析し、その思想の変節の契機と理路を解明することにした。以下、本論にあたる各章の概要を述べる。

第二章「近代日本と「生命」」では、本稿の分析視座である「生命」について検討した。「生命」という言葉が一般的になったのは文明開化期に“life（Leben / vie）”の翻訳語に当てられて以降のことであり、それ以前はむしろ「性命」が天から与えられた性質を意味する言葉として広く使われていた。「生命」という語が定着したのち、明治期から大正期にかけて西洋の「生の哲学」に影響を受け、生命主義思想が流行した。本稿では生の哲学のうち日本で広く受容された R・オイケンと H・ベルクソンを取り上げ、両者の思想と日本での流行の様子を確認した。また、近代日本に展開した生命主義思想の例として、北村透谷、岡倉天心、大川周明、大杉栄、賀川豊彦、暁烏敏を取り上げ、彼らの生命思想について検討した。

第三章「デモクラシー期の生命主義」では、大正新教育期の下中弥三郎の思想と行動に焦点を当て、それらを明らかにすることを試みた。まず、下中の教育運動の大きな達成である啓明会（1919 年）ならびに教育擁護同盟（1921 年）、そして教育の世紀社（1923 年）について、下中の動向を追いながらそれらの設立経緯と意義を確認した。その上で、この間の下中の教育論における「生命」に着目し、分析を試みた。下中は 1920 年前後から 1926 年頃にかけて、個人の内発本性である「生命」のみを尊重し、既存の教育制度や形式、文化を子どもの生命の成長を阻害するものとして否定する教育論を説いていた。彼において「生命」は自然な教育理想の象徴であり、西洋近代的な文明の反措定を意味する抽象性の高い観念であった。彼と教育の世紀社同人であった赤井米吉、志垣寛、野村芳兵衛らも顕著な生命主義教育論者であった。赤井はエマソンに強い影響を受け、宇宙論的で超越的な「神」を「生命」と見做し、志垣はベルクソン哲学に触発を受け、個別具体的かつ宇宙論的な存在として「生命」を構想しており、野村は親鸞思想を摂取し、宇宙唯一の実在を阿弥陀如来と同一視し、それを「生命」と称していた。下中が個の生命に立脚するのに比し、赤井らは超越的な生命観念を標榜するものであった。

第四章「生命主義の変調―社稷から生命国家へ」では、下中の思想が転回する 1926 年

から 1932 年頃を取り上げた。下中は 1925 年の農民自治会の設立を契機として、農村での「自治」を説き始める。その際、下中は農本主義者・権藤成卿に影響を受けている。権藤が自治思想の核心においた「社稷」とは農民の豊かな生活そのものを指しており、これはつまり農本主義的な立場からの生命主義思想と見做しうるものである。社稷はもともと国家をも含意していたことから、国家を要とする統治思想へと傾倒する理路が開かれていた。下中の「自治」概念は西洋資本主義文明への対抗概念であり、その点彼の農村自治教育論はデモクラシー期の生命主義教育論と軌を一にするところがある。アナキズム的立場から教化・啓蒙によって農村を救うことを目指した下中であったが、そうしたなかで西洋資本主義文明を超克し、自然的・アジア的支配を掲げる、大川周明の生命国家論に縫着する。下中は農民の生命を回復する活路を自身の思想と行動の原理であった「生命」、これを僭称した生命国家論に見出したわけである。以後、彼はアナキズムに見切りをつけ、支配肯定の立場から生命国家論を高唱するに至っている。

第五章「ファシズム期の生命国家論」では、総力戦体制のイデオローグとして政治活動に積極的に関与していた 1932 年以降の下中弥三郎に焦点を当てた。下中は大亜細亜協会（1933 年）で中心的役割を果たし、東亜建設国民連盟（1939 年）、そして大政翼賛会（1940 年）でも要職に就いていた。この間、彼は一貫して大川周明から摂取した生命国家論を鼓吹していた。それは民族の父たる天皇を中心として日本を一つの生命体と見做し、西洋的な法治主義、議会主義、そして資本主義を超克しうるとされた国家論である。当然、その教育論は生命国家建設を教育理想に掲げるものとなっていた。下中の教育言説は政治経済的次元では生命国家の存亡を賭けた国家主義教育論として展開し、宗教的次元では「生死を超ゆる」、「永遠の生命」を授けるものとして天皇が信仰の対象となり、結果、個人的生命の死を積極的に意義づける極端な全体主義教育論として立ち現れていた。このような事態は下中に限らず、赤井、志垣、野村もまた、生命国家論者の立場から全体主義を肯定するに至るのである。

以上のような本論文が既存の研究に対して認めうる意義は大きく 2 点考えられる。まず、これまで実証的には解明されてこなかった下中弥三郎の思想的軌跡である。本研究ではデモクラシー期からファシズム期にかけての下中弥三郎について、その変節まで射程に入れ、一貫した教育理想の象徴である「生命」に着目し、生命主義教育論者として明確に位置づけた。また、このように教育分野の生命思想を両時期に跨るものとして検討したことで、新教育運動の新たな捉え方を提示しえた。すなわちのちの戦時下日本の公式イデオロギーである生命国家思想に直截に連繋する思想としての、新教育期の生命思想である。無論、生命の自由な成長を尊重する教育思想は一定は評価されて然るべきであろうが、従来の先行研究に見られるような、「生命」の躍動する姿のみを言挙げする一面的な大正期教育運動の理解は危ういものと言わざるを得ない。